庭園 協会ニュース 第88号

一般社団法人 日本庭園協会

東京都新宿区西早稲田 1-6-3 フェリオ西早稲田 301
〒 169-0051　TEL:03-3204-0595（FAX 兼用）
E-mail : gsj20@m7.dion.ne.jp　URL : http://nitteikyou.org/

編集者：広報委員長・柴田 正文
　　委員・小沼 康子、加藤 精一、内田 均
題　字：故・上原 敬二
発行日：平成 28 年 3 月 17 日

第４回　東日本大震災復興記念庭園の築造風景（覚照寺）

伝統庭園技塾 五年目を迎える
東日本大震災復興記念庭園築造事業

廣瀬　慶寛

東日本大震災復興記念庭園築造事業が始まり、今年度で最終年の５年、あっという間である。計画当初にはここに庭園を造るには大変だなぁー、と思っていました。草木が生い茂り、谷戸の間で自然と染み出てくる水・堆積された土砂で沼の状態。荒れ果てていた現地であったが、４年が経過し大分庭園の雰囲気が出てきました。多くの皆様方のご協力をいただき着々と完成に向かっております。

この伝統庭園技塾に参加して、技を習得し人材育成を行っている会こそが、一般社団法人日本庭園協会ではないかと思っております。参加塾生者の目の色を見ているとキラキラと光っているではないでしょうか。必ず皆がこれからの庭園界を背負ってゆくことに間違いがないと確信しております。参加してこそ意義のあることだと思います。「技」・「心」・「伝」・「感」・「求」これ等のことを追い求めてきたからこそ、日本庭園協会が来年１００周年を迎えられることと思います。そして来年春の東日本大震災復興記念庭園開園式には、日本庭園協会の会員に多くの参加を呼び掛けたいと思っております。塾生たちが汗を流し、石・土・木・水・魂を入れ込んで築造した庭園であります。これらのことを一人でも多くの方から見ていただきたいと思っております。

そして各支部でも常に講習会が年々盛大に催されています。これもやはり何かを求めている現象ではないかと思います。『庭園協会支部・本部共催講座』『庭園連続基礎講座』『鑑賞研究会の講演会及び庭園見学会』にも多数の参加があり、これも盛大になってきています。各会員が新規会員の紹介の下、多くの研修会・講習会を開いて行き、今以上に活発な日本庭園協会としたいものです。

宮城県支部長はじめ支部スタッフの多大なるご協力の下、ここまで進めることができたことに感謝するとともに、最終年の今年10月には今まで以上の庭園協会会員・塾生の参加と、今まで参加をしていただいた塾生に元気なお顔とキラキラした目で参加を戴きたいと願っています。東日本大震災記念庭園築造事業が終了できることを祈っています。

（伝統庭園技塾 塾長、常務理事）

平成28年度

支部活動報告

神奈川県支部／東京都支部

神奈川県支部

箱根 岡田美術館庭園見学会

平成28年9月19日

岡田美術館庭園見学会　持田　智彦

今回の見学会は造園界では言わずと知れた「岩城（岩城亘太郎元理事長）」の現場ということで楽しみにしていた。完成して3年ほどの新しい現場で実際に作業された方の解説付きであった。

美術館の脇を通り抜け庭に出ると、そこには古い数寄屋を改修した建物と大きな池。その奥には山の斜面を背負い滝が数本落ちていた。ただ庭はそこから見えている場所だけでなくさらに山の斜面を登った所の奥まで続いており、渓谷の脇に園路が続いている。

その自然に観えた渓谷も今回造られたものと聞いてその規模に驚いた。

流れる小川も湧水の多い土地柄を活かし、元からあった自然の石組みに合わせて石を組み、その間を通るように整備したものであった。ふんだんに使われている石も美術館の建築中に大量に出た石を利用したもので、小松石やボサ石に似ているが色味が黄色い。普通、石屋さんが扱っていない石なので、私も扱ったことは無かったが、その土地で出たものであるから庭の環境によく馴染んでいる。その石は建物の建設により掘り出され一ヶ所に集積されたものを起伏にとんだ斜面の奥まで使っている。石を組む前に、石を据える場所に運ぶ作業が困難であったと解説を聞き、よくぞそこまでと感心した。管理の面でも自然の生長の勢いが強すぎて庭として成立させることが大変だということだった。

岡田美術館（開花亭より池を臨む）

普段私は「庭の中に自然」がある様にという意識は持っているが、今回の様に敷地が大変広く、環境のポテンシャルが高い場所では「自然の中に庭」を作る必要があることを知った。さらに自然の勢いを制御して庭を維持する事が困難であることも合わせて解説を頂いた。

今回の見学会では非常に大きいスケールでの作庭の考え方と苦労を見せて頂いた。また機会があれば、「岩城」さんの細かな技法が使われている現場を観てみたいと思った。

（神奈川県支部　正会員）

東京都支部

白駒池見学会

平成28年10月1日～2日

苔の森　白駒池を訪ねて

加藤　精一

東京都支部での活動主旨の一つとして、様々な世界の豊かな感性や、広い知見等を学び、より創造性を高め、現代社会に適応した仕事を目指しながら、庭園文化の伝統を継承していこうと、考えている点があげられます。

今回、自然の美しさを学ぼうという事で、苔と原生林が美しい白駒池に行くことになりました。

初日は、八王子駅に集合し中央高速で、始めに、溜池として作られた御射鹿池（みしゃかいけ）を訪ねました。運よく幻想的な霧が出てきて、ここのイメージを強く感じる事が出来ました。次に今回の目的地、白駒池を散策しました。白駒池の周囲には、10箇所の苔の森があり、今回は白駒の森とものけの森を見るだけでした。白駒池を訪れる機会がありましたら、ぜひたくさんの時間をつくって見ていただきたい。「北八ヶ岳苔の会」（www.kitayatsu.net）にて、色々と詳しく案内がされています。今度はゆっくりと時間をかけて訪れてみたい場所でした。そして近くの小海リエックスホテルにて、榊原氏に講習会をして頂き、夕食、懇親会と1日目が終了しました。

2日目は、八千穂高原自然園を訪ねました。28ヘクタールの園内に小さな滝、渓流やシラカンバの林など高原の自然が溢れ、他の季節にも訪れたり、スケッチをしたらいいだろうなと思える所でした。時間の都合で、日本一のシラカンバの森と唐松林は、バスから眺めながらの見学となり、最後の予定地の小海高原美術館（1997年開館、八ヶ岳の麓に建つ安藤忠雄氏設計の美術館）を訪ねました。周囲の自然に調和した、洗練された空間と言われている美術館ですが、今回の参加者の皆さんは、それぞれの思いを持って見学されたようです。その後、昼食を評判のお蕎麦屋さんで取り、帰路につき八王子駅で解散しました。

今回久々の1泊の見学会でしたが、準備不足で、もっと現地の情報や、資料等用意できれば、より意義のある見学会にできたのではと反省する次第です。また機会をつくりたいと思います。

（東京都支部　支部長）

霧の御射鹿池

苔と原生林の見学会を通じて

小林　裕子

小雨の降る中、私達はバスに乗り込み目的地である「白駒池」に向け八王子駅を出発しました。その途中、御射鹿池に立ち寄りました。御射鹿池とは長野県茅野市にある溜池で日本画家の東山魁夷作『緑響く』でも知られており、八ヶ岳中信高原国定公園に指定されている深い緑に囲まれたところにあります。バスを降りると雨は止んでおり、そこには幻想的な霧に包まれた池がありました。紅葉はまだ浅くその霧に木々が埋もれている感じではありましたが、やはり美しい。池面には樹木が映り込み水墨画の様でした。時間と共に霧の濃淡が移ろい、いつまでも眺めていたい景色でしたが、バスに乗り込み次の目的地白駒池へ。

入り口に到着すると辺りは霧雨が降っていました。山道は滑りやすく一歩一歩足元を確認しながら登って行きました。ふと立ち止まり周りを見ると、辺りは苔に覆われており、その苔は雨に濡れきらきらと輝いていました。そんな見応えのある原生林を抜けると、紅葉した木々に囲まれた白駒池が顔を出しました。池の畔の山荘で昼食を取り、外に出ると、雨は止み雲の合間から光が射していました。時間の都合もあり、今回は池を一周するコースを選び、歩きはじめました。水辺を左手に見ながら岩石の上に掛けられた板の橋の上を一列になって進み、所々開ける場所で周りの変化を楽しみながら進んでいくと、苔に覆われた巨大なコブが無数に現れました。「もののけの森」と言われるその場所は、そのコブに何か潜んでいそうな穴がいくつも見られ、まさにイメージはもののけ。その景色がどこまでも続く神秘的な所でした。しばらくの間私は足を止め、その場所にいました。そしてそこに生息する苔も様々でとても興味深いものでした。後で知ったのですが、八ヶ岳には485種類もの苔が確認されているそうです。

「もののけの森」の巨大なコブ

翌日、八千穂高原自然園に向かいました。やはり紅葉には少し早い感じではありましたが、自然園というだけあって人の手が入っていないまさに自然そのもの。生い茂る木々の小道を行くと、シダ植物の鮮やかな色が目に飛び込んできました。うねる山の地形、木の葉に覆われた茶褐色の地面の上に点在する緑。園内には川もあり滝もあります。普段の生活では見ることのない植物の生態や自然のサイクルを確認する上でもこのような見学会は必要です。

今回巡った白駒池や自然園にはまだいくつもの散策路があり、何度行っても発見はあるでしょう。またこの会には東京都支部で勉強会講師を務める榊原八郎氏も同伴してくださり、「自然のカタチ」について皆さんと共に見て聞いて感じることのできた散策となりました。これはやはり同じ造園に関わる仕事をし、また興味を持っている者たちが交流するからこそできることなのだと思いました。

（東京都支部　正会員）

編集委員コラム

木になる葉なし 7

小沼　康子

林芙美子記念館
―林芙美子の庭―

林芙美子が落合界隈に住み始めたのは昭和5年。ベストセラー「放浪記」が刊行され、ようやく流行作家として売れ出した頃である。落合では2回転居している。最初の家は妙正寺川の南側の上落合、2年ほどで、川一つ隔てた下落合の借家に引っ越した。そこは、「なかなか住みいい処」だったが、「8年程住みなれていた借家を、どうしても引っ越さなくてはならなくなり」、「下落合は、去りがたい気がして」と、現在の場所に地所をもとめ家を建てた。そこが、昭和16年から昭和26年に47歳で亡くなるまでの10年間過ごした家、現在の「林芙美子記念館」である。

芙美子は、「住みいい」「去りがたい」と思うのは、「町の中に川や丘や畑などの起伏がたくさんあるせいかもしれない」と書いている。

起伏がたくさんあるのは、落合周辺の地形によるもので、この辺りは豊島台地と淀橋台地、その間の低地で形成されている。低地には妙正寺川が流れており、北側の豊島台地は川の近くで急に落ち込んで急坂が多く、南側の淀橋台地は川に向かって緩やかに傾斜している。確かに起伏に富んだところである。

最初の住まいは、川の南側の傾斜地にあった。2番目の家は、北側の高台で、そこから「昔住んでいたうちや（中略）、昔は広い草の原であった住宅地などが一眸（いちぼう）のうちに見える」とあるから、かなり眺めのよい場所だったのだろう。変化にとんだ地形と眺望は、庭をもうけるのに最適な立地条件であるが、さて、扶美子の庭はどうだったのだろうか。「なかなか住みいい処」だった家には、「庭が広く庭の真中に水蜜桃のなる桃の木の大きいのが一本」あった。この桃の木のまわりに「何といっても好きなれんげやたんぽぽをたんせいして」植えていたところ、訪ねてくる人たちは、「そこへ自然に咲いたかのごとく考えるのか（中略）摘んで帰って」いくと嘆いている。芙美子にとって、「れんげやたんぽぽは故郷へ帰ったようなつかしさを感じる花」で、いかにも自然に咲いているのがいいのである。野の花を「自然に咲いたかのごとく」に植えるとは、正に造園の極意。そこに芙美子の自然観、庭園観がうかがえる。

扶美子邸全景

では、初めての持家では、どのように庭を楽しんでいたのだろうか。家を建てるにあたって芙美子が望んだのは「東西南北に風が吹き抜ける家」だった。庭には、モウソウチクを好んで植えたという。茶の間で息子の泰と食事をしている写真には、確かに竹が写っている。竹を好んだのは、竹林を抜ける風や風音の自然さに惹かれてたからなのだろうか。始めは、門から玄関にかけて植えられていたが、やがて庭全体に広がったらしい。現在は、客間前の庭と門と玄関の間にわずかに面影を残しているのみで、主庭は、いわゆる庭として整えられている。受付で聞けば、竹は、芙美子の葬儀の際、だいぶ伐られたとのこと。告別式は、川端康成を葬儀委員長として執り行われ、文壇等の関係の人々の他、主婦や労務者、学生、等々の一般焼香者が長蛇の列を作ったというから、庭の竹が伐られるのもやむなしだったのか。その後も、徐々に竹は少なくなり、今のような庭となったと聞く。

玄関のたたずまい

「玄関前の敷石は、植木職人といっしょに芙美子と緑敏が並べたもの」というから、今ではこの辺りに芙美子の庭が偲べるのかもしれない。

※参考文献：「林芙美子随筆集」「林芙美子記念館図録」
所在地：東京都新宿区中井